

【 令和 6 年第 4 回定例予算特別委員会 】

【 畑作振興について 】

本道の畑作の主要産品である小麦、大豆、てん菜、ばれいしょは、いずれも生産量が不動の全国 1 位となっており、日本の食卓を支えていると言っても過言ではありません。道内の畑作物生産は、農業産出額全体の約 14% を占める主要な部門の一つとして、地域経済・社会にも大きな役割を果たしています。日本の食料安全保障を支えるためにも、本道畑作の持続的な振興が必要だと考えますので、以下伺います。

(一) 作付け状況の推移について

はじめに、本道の畑作の主要な産品である、小麦、大豆、てん菜、ばれいしょの 4 品について、それぞれの近年の作付け状況の推移を伺います。

(答弁：農政部生産振興局農産振興課長 花岡弘毅)

・小麦の作付け面積は、令和 3 年産の 12 万 6100 ㍎から、6 年産では 13 万 1800 ㍎と 5700 ㍎増加

・大豆は、3 年産の 4 万 2000 ㍎から、6 年産では 4 万 6800 ㍎と 4800 ㍎増加

・てん菜は、3年産の5万7500 ㍩から、6年産は4万8850 ㍩と8650 ㍩減少

・馬鈴しょは、3年産の4万4050 ㍩から、6年産は4万6250 ㍩と2200 ㍩増加

(二) 持続的畑作生産体制確立緊急支援事業について

畑作地域においては、ばれいしょや大豆等の需要が高まる一方で、労働力不足への対応などが課題となっています。

こうした課題に対応するための取組を支援することを目的として、国では令和5年度の補正予算で『持続的畑作生産体制確立緊急支援事業』が措置されていますが、事業の実施状況について伺います。

(答弁：農産振興課長 花岡弘毅)

・道では、本事業を活用し、馬鈴しょ生産において、ドローンやAI画像認識技術を活用した異常株発見システムの実証に取り組んでいるところ。

・また、道内221の事業実施主体に対し、馬鈴しょの倉庫前

選別機の整備、てん菜の播種機の導入、小豆・いんげんなど需要の高い作物への転換、そばの複数年の契約取引の拡大などを支援。

(三) 小麦・大豆の生産拡大について

小麦、大豆といった輸入依存度が高い農産物については、食料安全保障の観点からも国内シェア拡大に向けた取組の推進が必要となっています。

道としては、生産拡大に向けて、どのように取り組んで行くのか伺います。

(答弁：生産振興局長 牧野充)

・小麦や大豆の国内シェアを高めていくため、全国一の生産量を誇る北海道が生産拡大や品質の向上を図り、安定的な供給体制を整備することが重要。

・道では、栽培技術指導、農業機械の導入、基盤整備、スマート農業技術の活用による省力化、集出荷貯蔵施設の整備など生産基盤の強化に取り組んでいる。

・こうした取組に加え、新品種の開発・普及、道産小麦の需

要拡大に向けたPR、道産大豆の販路拡大を進め、道産小麦や大豆の生産力の強化と安定供給に努める。

(四) てん菜生産について

砂糖の消費量が消費者の嗜好（しこう）の変化などから減少傾向にある中、てん菜の生産について、国は、令和4年12月に『持続的なてん菜生産に向けた今後の対応について』を策定し、令和8年の指標面積を5万㌦と設定しています。先ほどの答弁では、すでに本年の作付け面積は、その指標面積を下回っているとのことでした。

道は、こうしたてん菜生産の現状を踏まえ、今後、どのように対応していくのか伺います。

(答弁：生産振興局長 牧野充)

- ・砂糖の原料であるてん菜は、本道の畑作農業に欠かせない基幹作物。製糖工場は、地域の雇用や経済を支える重要な役割。適正な輪作体系を維持していく上でも、てん菜の安定的な生産が必要。
- ・こうした中、国は、てん菜糖への交付金の対象数量を令和

8年産までに段階的に削減する方針を決定したほか、担い手の高齢化に伴う労働力不足や、近年の資材価格の高騰などにより、てん菜の作付け面積が大きく減少。

・道としては、関係機関・団体と連携し、省力・低コスト生産、猛暑に対応した栽培技術、耐病性に優れた品種の開発・普及などを進める。国に対し、輪作体系の維持に必要な事業の拡大や予算の確保を求めるなど、てん菜の安定的かつ持続的な生産に取り組む。

(五) ばれいしょの病害虫対策について

1 ジャガイモシストセンチュウ (Gr) 対策について

全国の生産量の8割を占めているばれいしょについては、ジャガイモシストセンチュウいわゆる『Gr』の道内全域における防疫対策が重要となっております。

抵抗性品種の開発推進が重要と考えますが、どのように取り組んでいるのか見解を伺います。

(答弁：技術普及課長 原 俊彦)

・防疫対策では、抵抗性品種を組み入れた、輪作が有効とな

っている。

- ・品種開発に当たっては、抵抗性はもとより、優れた食味や加工適正が重要であり、これまで、生食用や加工用、でん粉原料用を開発してきたところ。

- ・道としては、道内の試験研究機関と連携を図りながら、抵抗性品種の開発に取り組んでいる。

2 ジャガイモシストセンチュウ（Gp）対策について

ばれいしょの病害虫については、ただ今伺った『ジャガイモシストセンチュウいわゆる『Gr』に加え、平成27年に国内で初めて確認されたジャガイモシロシストセンチュウいわゆる『Gp』の発生地域において、徹底した防除対策が急務となっています。

防除対策の実施状況などを伺います。

（答弁：技術普及課長 原 俊彦）

- ・平成27年に網走市において発生が確認され、緊急防除をはじめ、まん延防止対策を実施し、発生した330ほ場、1236畝の9割以上で検出限界以下となった。

・道としては、緊急防除はもとより、まん延防止対策の徹底を図るとともに、国に対し、必要となる予算の確保などを求めてまいらる。

(六) 今後の取組みについて

本道の畑作物の更なる発展を目指していくためには、地域の輪作体系を確立しながら生産性を向上していく取組を行っていくことが重要と考えます。

今後、本道畑作物の安定的な発展に向けてどのように取り組んでいくのか、部長の所見を伺います。

(答弁：農政部長 水戸部 裕)

・本道農業が食料供給地域としての役割を果たし、安定的に発展していくため、適切な輪作体系のもとで、需要に応じた畑作物を安定的に供給していくことが重要。

・道では、計画的な基盤整備、共同利用施設の整備、スマート農業技術の活用、ジャガイモシストセンチュウなどの病害虫に対する抵抗性品種の導入、需要の高い加工用馬鈴しょの生産拡大など、適正な輪作体系の維持・確立を進めながら、

本道畑作農業の持続的な発展に努める。